

25 I've got six pence

1. この歌の時代背景

マザー・グース童謡集に“*I Love Sixpence*”と言う歌がありますが、それがこの Shanty のオリジナルと思われます。文献初出は Gammer Gurton's Garland (ガートンばあさんの名曲集) の 1810 年版といいますが、実際はそれより更に古い時代に作られたイギリスの歌と言うことになります。

おそらく、後に別のヴァージョンかパロディとして、このシャンティは生まれたものと思われます。

所で、当時の船乗りの給料は地上で働く労働者の僅かな賃金と比べても安かったようです。果たしてこの銀色のコイン一枚にどれ程の価値があったのか定かではありませんが、例えばシェークスピアの戯曲「十二夜」の Sir Toby のセリフに“*Come on! There is sixpence for you, Let's have a song*” (さあ、お前に 6 ペンスやろう。一曲歌ってくれ) というのがありますし、又、リチャード・B・シュヴオーツという人の書いた、「18 世紀ロンドンの日常生活」(研究社出版)を読みますと、当時兵士は一日 6 ペンスで戦っていたとあり、一般の労働者は一週間(一日 15 時間労働)に 10 シリング稼ぐかどうかだったと書いてあります。時代はずっと下りますが、有名なサマセット・モームの「月と 6 ペンス」の 6 ペンスも“取るに足りないもの”を意味しているそうです。

因みに、当時の物価ですが、4 ポンドの食パンが 4~5 ペンス、弱いビールがガロン当たり 1.5 ペンスだったそうですから、6 ペンスの価値もおおよそ見当が付きそうです。

ましてやこの歌の歌詞のように、6 ペンスで一生暮らしていけるとか、王様になったような幸せな気分とか言っているのは、実は本心ではなく、むしろ船乗りの給料が当時はそれほど安かった事を皮肉を込めて歌っていると解釈すべきでしょう。

そう言えば、もう一つの Shanty、“*Leave Her, Johnny*” では船乗りの給料の安さをもっと単刀直入に表現していました。

2. この歌の日本語訳

稼いだ 6 ペンス

6 ペンスも稼いだぞ、
大層な大層な 6 ペンスを、
6 ペンスも稼いだぞ、
一生暮らしていける 6 ペンスを、

稼いだ内の 2 ペンスは自分のために使ったよ、
それからもう 2 ペンスは仲間に貸してやった、
残りの 2 ペンスは家で待ってる可哀想な女房に送ってやった、

これで僕を悲しませるような心配事は何一つないよ、
それに僕の気持ちを感わすようなかわいい娘もないしね、
今の僕は王様と同じくらい幸せさ、本当だとも、

俺達は船に揺られて故郷へ向かって航海してるんだから、

銀色の月の光に照らされて故郷へ向かって船に揺られながら、
何と言っても給料日に列ぶときは最高に嬉しいね、
俺達は船に揺られて故郷へ向かって航海してるんだから、

一銭の稼ぎもなかった、
大層な、大層な一文無しだ、
一銭の稼ぎもなかった、
一生暮らしていけるだけの、

一銭の稼ぎもなかった、
自分のために使う金も、
仲間に貸してやる金も、
家に待ってる可哀想な女房に送ってやる金も、

それでも僕を悲しませるような心配事は何一つないよ、
それに僕の気持ちを惑わすようなかわいい娘もないしね、
今の僕は王様と同じくらい幸せさ、本当だとも、

俺達は船に揺られて故郷へ向かって航海してるんだから、
銀色の月の光に照らされて故郷へ向かって船に揺られながら、
何と言っても給料日に列ぶときは最高に嬉しいね、
俺達は船に揺られて故郷へ向かって航海してるんだから、

解説及び日本語訳：宮崎多加雄

帆船日本丸男声合唱団用資料

№ 6-069